

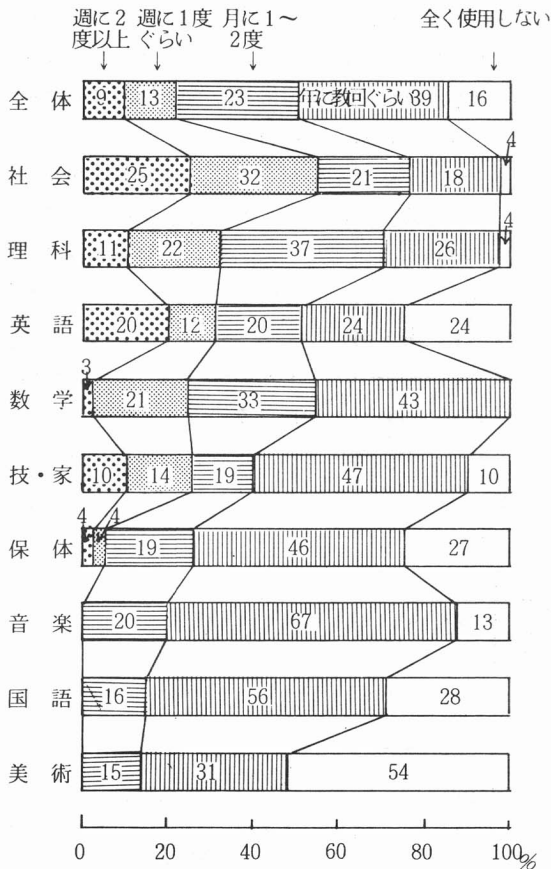
生は、小学校の31%，中学校の22%である。

このデータを見るかぎり、OHPの利用状況はきわめて低いといえる。さらに、このデータ＝福島県の実態であるならば、OHPだけでなく、他の教育機器の利用は、もっと悪いことになる。

この傾向は、小学校の場合、低・中・高・担任外を問わずほぼ同じ傾向である。

しかし、中学校についてみると、教科によってかなりの違いがみられた。中学校における教科別の利用状況をまとめたものが<図2>である。

<図2> 中学校における教科別利用状況



〔考察〕

教科によって、利用の度合いに違いのみられるのは当然のことであるが、教科間にあまりにも差がありすぎるように思われる。また、この差は、一般的に言われている、OHPを利用しやすい教科、TPを作りやすい教科というのと利用状況が一致している。今後、各教科の特質を生かした活

用法を工夫・研究し、利用の増大をはかっていくことが非常に重要である。

(5) OHP利用のねらい

授業の際、OHPはいろいろなねらいをもって利用される。先生方の利用の際の最大のねらいは何であるかを調査してみた。

設問5 OHP利用のねらい

OHPの効果を生かした利用のねらいに、次のようなことが考えられますが、あなたはどの項目に一番重きをおいて利用しますか。

<表11> OHP利用のねらい

項目	学校	
	小学校	中学校
理解や思考を助け、知識や技能の習得を確実にする	45.8%	53.5%
学習の動機づけをし、学習活動を積極的にさせる	25.6%	25.7%
共通の経験を与え、共同思考をしやすいとする	17.3%	11.7%
経験の拡大・深化をはかり学習を助長する	9.5%	8.6%
望ましい態度や心情を育てる	1.8%	0.5%

〔考察〕

小学校・中学校とも、非常によく似た傾向を示している。各項目の割合がほぼ同じであることはOHPの利用に関して、小学校と中学校、ともに違いがないことを示している。

理解や思考を助け、知識や技能の習得を確実にするために約50%、学習の動機づけをし、学習活動を積極的にさせるが約25%である。この二つの項目で、全体の約75%になってしまう。

このことから、大部分の先生方は、動機づけ、理解や思考、技能を習得させるためにOHPを利用していることになる。そのため、OHPを効果的に利用するためには、理解や思考を助け、知識や技能の習得を確実にするソフトウェア、学習の動機づけをし、学習活動を積極的にするソフトウェアの開発・製作が重要になってくる。